

令和6年度 幼児教育研修（年齢別担任研修1歳児・第2回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

日時：令和6年7月25日（木）15:00～17:00

会場：足立区生涯学習センター

講師：東京未来大学 非常勤講師 小野崎 佳代 氏



前回の研修の復習



発達とは環境との相互作用によって
資質・能力が育まれていく過程

- ・「できる」「できない」という捉え方ではなく、それぞれの子どもの育ちの過程を大切にする
- ・発達には個人差がある。特に乳児期は大きい。一人一人の異なる歩みに寄り添い、その子らしい育ちを支える。（アタッチメントの関わり）



1歳児保育のポイント

- ① 自我の芽生え・育ちを支える
- ② 意欲を育てる
- ③ 「やりたい」がかなう環境の工夫
- ④ 友達と関わる喜びを支える



子どもの「やりたい」をどう支えるか、保育の映像から3つの視点で
考察し、グループで話し合いました



（3つの視点）

- ① 子どもの姿から感じたこと、考えたこと
- ② 保育者の関わりから感じたこと、気付いたこと
- ③ 環境について感じたこと、参考になったこと



場面1：室内での遊び・保育室の環境

お絵描き・ソフト巧技台・ままごとなど、安心できる大人の元で自分の思いを出したり、やりとりをしたりしながら遊びを楽しんでいた。

クレヨンで絵を描く子、クレヨンを出し入れて遊ぶ子と、楽しみ方は一人一人違うが、それぞれが楽しめている。



保育者は、その子なりの楽しみ方を受け止めている。「どうぞ」「ないね」の言葉のやりとりは、子どもの姿を意味づけていた。

チェーン・スポンジなど、子どもたちがイメージしやすい素材が用意されている。



ソフト巧技台で遊ぶ場面で、子どもの動きを見守り、危ない時に声をかけていた。制限（やらないよ、こっちからなど）のない遊びができるよう保育者の関わりの工夫が大事だと思った。



場面2:ホールでの遊び

ウレタン積み木を使って体を動かしたり、ヨーグルトカップや輪投げで遊んだりしている。カーテンの後ろに隠れて保育者とかくれんぼを楽しむ姿も見られた。



大人の声掛けが穏やかだった。「こっち空いてるよ」「ここから行かれるよ」という声掛けて、「ダメ」「やらない」の言葉がなかった。

保育者が持っているヨーグルトカップを手で落とすと、「な～い、な～い」と手のひらを指差して教えていた。保育者は「ないね～」と共感している。そのやりとりに楽しさを感じ、繰り返し遊んでいた。



カーテンに隠れて保育者に「ばあ～」とやって見せた。保育者が、自発的な遊びに気づき、対応していた。

ウレタン積み木を太鼓のように叩いて遊んでいる子の様子を見て、他児が自分で積み木を持ってきて参加した。同じことができることを喜び、嬉しそうな表情で遊んでいる。



場面:3 ウレタン積み木での遊びの場面

A児は、ウレタン積み木を転がす遊びを、大人とやりとりをしながら楽しんでいる。その様子を見ていたB児がA児に近づき、B児が使っているウレタン積み木を持って行ってしまった・・・

B児はA児と関わりたいという思いから、ウレタン積み木を取ってしまったのではないか。



保育者は、子どもと視線を合わせてからウレタン積み木を転がしていた。子どもに気持ちを合わせている。

まだ関わり方がわからないので、「取る」行動になってしまったのではないか。



取られてしまった時、保育者が子どもの思いを言葉で代弁していた。

まとめ

★ 全体を通して ★

- ・気づきを促す言葉はあるが、否定的な言葉がない。
- ・同じ場所で同じ遊びをしているが、それぞれ違った遊びをしている。保育者はそれぞれの遊びが楽しめるように環境をつくっている。
- ・学ぶの語源は『まねぶ』。まねっからきている。同じことをして遊ぶことが好きな年齢であり、まねっしながら言葉を吸収している。
- ・今何を楽しんでいるのか丁寧に見ることは、子どもの理解につながり、豊かな遊びを保障している。

研修生の報告書より



子どもの自我を受け止め、「つもり」や「やりたい」がかなう関わりをもつことが大切だと学んだ。遊び方の固定概念に捕らわれず、何を楽しんでいるのか、どんなことをしたいのか、よく見ていきたい。

→研修で学んだことを意識して保育を行った。巧技台を太鼓に見立てて叩き、音を鳴らすことを楽しむ子がいた。今までは「ここは〇〇しようね」と決めつけてしまう声掛けになっていたが、子どもがしていることを受け入れて「ポンポンなるね」等と声を掛けると、音を鳴らすことを楽しんでいた。声掛け一つで、子どもの遊びが広がることを学んだ。